

定年から学ぶ楽しさ

第1年次は幅広い分野について学ぶことができ、とても有益だった。そこで感想文をもう一步発展させ、第2年次に取り組みたいことについて述べてみたい。

市民大学を生涯学習の契機に

定年後は年金でのんびりと趣味の生活。それもよい。でも人間は楽しいだけでなく、何か創造的なもの、あるいは他の人や社会に貢献できるものがある。こそ本当の幸せや充足感を得られるものだ。

定年後は、HavingでなくBeingが大事になってくる。財産や貯金を持っていることも大事だが、今、何をやっているかが問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題なのである。夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創る。

何歳になっても学び続けるところには、前向きで新鮮な人生がやってくる。知的好奇心、向学心を抱き続けることは、精神の若さを失わない秘訣である。ボケ防止にも最適となる。学ぶことに年齢は関係ない。生涯学習とは自らへの再投資ともいえる。市民大学はそんな人へ契機を与えてくれている。

市が運営するこんなよい企画に、今年度の募集と応募状況を見て、なぜ一般市民の参加が少ないのか疑問に思った。市のPRが不足なのか、市民の意識が薄いのか。2年度の「地域の教育力」でこんな点についても調べてみたい。

新時代の“老人会”のあり方について

現在、地元つつじが丘シニアクラブ（「老人会」とは呼ばない）の役員をしている。今の課題は、いかに若い高齢者をクラブに引き込んでいくか、彼らに魅力的なクラブにしていくか、ということである。

つつじが丘北住宅の人口は4118人(2004年)。うち60歳以上は724人。そのうちシニアクラブに入っているのは220人余り。3割に満たない。「まだ仕事を持っていて忙しい」「自分一人の活動で十分だ」「高齢で健康面から参加が無理」あるいは「他人との付き合いがわずらわしい」といったさまざまな要因があるようだ。

これから団塊の世代が定年を迎え、職場から地域に戻ってくる。そこで「じゃあ老人会に」と誘われたとしたら、今のままだと、大部分の人が「いや、ま

だまだ結構です」なんて辞退するような気がする。当初、自分も「エッ もう老人の仲間入り?!」なんて、ずいぶん尻込みしたものだ。幸いにもその後、クラブの中にパソコンサークルが誕生、その活動を通して、やや精神的な救いを得たような気がする。これからも同じような感情を持つ人が出てくるにちがいない。

自分が子供だった頃、60歳といえば本当に「おじいさん」で隠居状態の人も多かった。当時の60は今の80。人生80年いや90年といわれる現在では、60歳から90歳代までを「高齢者」として同一枠で括ること自体が無理なのかもしれない。

ここで大事なことは、時代の流れで、半世紀前と、社会も老人会の該当年齢者の状況も変わっていることに合わせて、活動内容もイメージも変えていかなければいけない、ということだろう。

例えば、大きく60代の“ヤング老人”、そして70代以降の“オールド老人”に分けてみる、といったような工夫が必要なのかもしれない。新時代に合った“老人会”また「老人」に代わるもっと前向きな言葉の創出について考えてみたい。

“人生に定年なし——学ぶことをやめるとき人は老いる”

1. なぜ「生涯学習」をテーマに選んだのか？

もうずいぶん前から日本は人生 80 年時代に入った、と言われてきた。少子高齢化は更に進み、もはや人生 90 年時代との声も出始めている。となると定年後の 20 年、30 年をどう過ごしていくのかが大きな問題となってくる。おりしも団塊の世代が定年を迎え始める 2007 年を間近かに、それは喫緊の課題となってくるだろう。

書店にはこのテーマに関するいろんな本が並び始め、マスコミが取り上げる頻度も多くなってきた。国また地方の行政も本格的な対応も求められてきている。一方では経済的視点から、これをビジネスの好機と捉える動きもある。

大事なことは、こうした時代の流れの中で、個人が自分の生き方を確立していくことであろう。定年後も続けて仕事がある人はラッキーである。打ち込むものがあるからである。でも、そうした人でもいつかは自由な時間を持つようになる。そのときどうするか。また現在すでに時間を持て余そうとしている人はどうしたらよいのか。

定年後は年金でのんびりと趣味の生活——それも良いだろう。でも人間は楽しいだけでなく、何か創造的なもの、あるいは他の人や社会に貢献できるものがあるからこそ、より深い幸せや充足感を得られるものだ。

そこで私は、定年後もう一つ充足感がないと言う人には、もう一度勉強をすることをお勧めしたい。

何歳になっても学び続けるところには、前向きで新鮮な人生がやってくる。知的な好奇心、向学心を抱き続けることは、精神の若さを失わない秘訣である。ボケ防止にも最適となる。学ぶことに年齢はない。生涯学習は自らへの再投資ともいえる。ありがたいことに市民大学はそんな人への機会を与えてくれている。そこで私は「地域の教育力」のコースの中で、更に焦点を絞って「シニアの生涯学習」について考えてみる道を選んだのだった。

2. 資料の収集

テーマを決めてから、その気で新聞や雑誌に目を通していると、最近では高齢者に関する記事がいくらかでも出ているのがわかってきた。シニア世代向けの雑誌類も雨後の筍のように増えている。テーマに沿った単行本も書店に行けば山と目につく。

私が購読している（またその通信員になっている）雑誌に「日経マスターズ」がある。「自由に働く自在に遊ぶ、人生の達人へ」が編集社で、比較的若い活動的なシニアを対象としている。定年後の人生をいかに充実させていくかといった企画記事が中心である。もう

一つ、フォーラムへの参加が縁で送られてくる「サードエイジスタイル」との雑誌がある。これはかなり高齢なシニアまた女性も対象とした隔月刊の雑誌で、やはり高齢時の人生のあり方を追求している。どちらも前向きな生き方を提言しており、夢と希望と活力を与えられるような気がする。

書籍については、類書があまりに多くてここに挙げるのは難しい。私個人として参考となった本の作家としては、堺屋太一、堀田力、鳥越俊太郎などが挙げられる。特に「高齢化大好機」などと、高齢化はマイナスの側面のみでなく、考え方によっては大変なプラス面があるとする堺屋氏の提言などは、参考になるところが多い。

インターネットから得られる情報は残念ながらそれほど多くはない（自分のネットへの習熟度が足りない面も影響しているかもしれないが）。全国や都道府県の老人会、シニアクラブの案内みたいなものが多く、これは私流に言えば主に“オールド老人”対象のもので、現在の60代前半の人や団塊の世代、つまり“ヤング老人”の対象にはなっていないような気がするのである。

3. 地元での活動

この3月で自分は65歳になる。5年前、定年になるとすぐに地元つつじが丘のシニアクラブから入会の誘いがかかった。当初、「エッ もう老人の仲間入り?!」なんて、ずいぶん尻込みしたものだ。幸いにその後、クラブの中にパソコンサークルが誕生（結果的にその立ち上げの中心となり、まとめ役になってしまったが）、その活動を通して、やや精神的な救いを得たような気がする。そして「老人会」でなく「シニアクラブ」という名称だったことも。些細なことのようにだが気分的に大事なことで、これからも同じような感情を持つ人が出てくると思う。

サークルの誕生に合わせてるように、クラブの機関紙「ゆずりは」の編集を依頼されるようになった。また自分の号棟の役員も引き受けることになった。こうしてクラブの皆さんとの交流が深まるにつれて、“ヤング老人”への参加啓蒙の問題が、自分にとって大きな研究課題となってきたのだった。

幸いにも、地元のつつじが丘北小学校区は、生涯学習の実験地域として「いきいき楽習協議会」に指定され、今後の活動が注目されている。私自身はまだそこには参加していないが、いつかの時点で何か役立っていきたいと考えてはいる。

仕事はシルバー人材センターで、昭島駅南口立体駐輪場の自転車管理に携わる傍ら、空いた日には元の職場の関係で、訪日した外国人のアテンドまた海外留学する日本人の相談等にあたっている。更に月に1~2回、立川の女性総合センター・アィムで在日外国人の相談担当員としてボランティアで活動に参加している。

ほかに若干の書き物をしたり、自分のホームページ作成に携わったり、そのためのパソコンの勉強に取り組んだり、結構忙しい毎日だがそこに充実感を感じている。私自身、現時点では恵まれた環境にあることを感謝している。そこで思うことは、誰にとっても、定

年後も自分を発揮できる“場”が必要ではないか、ということである。そんな“場”を行政が、地域が提供できるようになれば理想だと思う。

4. 市民大学で学んだもの

1年次、2年次を通じてシニア問題に関して、印象に残った言葉や考え方を拾い出してみると：

「男は定年後、初めて『市民』になる。本当の自分になれる」

「80歳の婦人の例→毎日行くところがあるから元気である」

「リハビリ交流会——化粧は人の生き方まで変えてしまう」

「循環型社会そして脱成長社会、脱物質社会へ」

「学校を終えてからの大人の“成長力”の大切さ」

「これからは物づくりではない。知識であり情報である。インターネット（英語）が世界をリードしていく」

市役所の生涯学習部を訪ね、資料をいただき質問もした。市としても福祉を初め高齢者対策をいろんな形で進めているのがわかった。でも、私の言う“ヤング老人”への対応や準備はまだまだこれからの段階、との感がした。専門の大串先生も、私の質問に、全国でもまだモデルになるような事例はない、とも言われた。国もどこの市町村も同じような状況にあるに違いない。団塊の世代が大量に定年を迎えるのを前にして、いよいよ本格的に取り組む段階が迫っている、と見ることができるだろう。

一方、コースの仲間との語らいの中で、フッと自らの考え方を反省させられる言葉も耳に届いた。「市が提供してくれているこんな素晴らしい市民大学に、どうして参加者が少ないのだろう？」との私の発言に、ある方が言った。

「『市民大学？ シニアになってまで勉強なんてまっぴら御免だワ。そんな硬い世界に行く人とはお付き合いしにくいワ』って言った友人もいたんですよ」

人生いろいろ。考え方も生き方もいろいろなのだ。こちらの一方的な思いを押し付けてはいけない。いろんな考え方、いろんな人生があっていい。それで社会は成り立っている。でも、その中で、定年後をより充実させていく一つの道が「生涯学習」にあることは私の持論であり確信でもある。

5. 自論と実践

現役時代、私はたまたま長期間、海外に滞在した。ラテン・アメリカを中心に世界の各地を訪れる機会にも恵まれた。定年後は横田基地の中にあるセントラル・テキサス・カレッジに学び、スペインのマラガ大学にも1年間留学した。そこで見聞したエピソードに次のようなものがある。

——マラガ大学のクラスで、スペイン語文法の年配教師ラファエルが言った。

「少し前のことだけど、クラスに勉強熱心な日本人学生がいた。クラスには多くの国の若者がいて、お互いに自分の国について紹介しあう機会があった。そのとき彼はこう言ったんだ。『日本は経済的に大きく発展してきた。それはみんなが働き者で、例えば会社に貢献するために、土・日であっても翌週どうしたら仕事の成果を上げることができるか一生懸命に考えているんだ』って」。

「そこで自分は答えたんだ。『スペインではね、ウィークデーに働いている間も、週末には何をやって楽しもうかと、そればかり考えているんだ』ってサ」

時代の流れでシエスタ(昼寝)の習慣こそ薄れてきつつあるが、スペインの生活のリズムは日本に比べてゆったりである。仕事がきょう終わらなければそれは「アスタ・マニャーナ(明日また)」でもよいのである。それよりも個人の生活を大切にしている。スペイン文化が浸透したラテン・アメリカの国々でも、人々の生き方や生活のリズムは押しなべて同じである。

アメリカに定年制はない。年齢によって雇用を制限することは、人種差別と同じく年齢による「差別」だというのである。ただし会社の状況や被雇用者の体力等から相応の対応がはかられているようではある。

世界にはいろんな考え方があり、いろんな生き方がある。世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいある。日本人は他人の目を気にし過ぎる。「ねばならない」との固定観念からの解放、自分の内なる構造改革こそ大切なのである。定年後は自分が主人公である。自分でどのようにも人生を演出できる。

伊能忠敬が天文学の本格的な勉強を始めたのは、隠居した後の 52 歳のときであった。人生 50 年と言われていた時代である。先生は 19 歳も年下の高橋至時だった。以来、72 歳まで測量を続け、日本全国の地図を完成させた。

現在、私はNHKのラジオ講座「シニアのためのものしり英語塾」を聴講している。おりしもこの 1 月には「名言に学ぶ英語と人生」の項で恰好の言葉が紹介された。——あの「自動車王」と呼ばれた、アメリカのヘンリーフォードは次のように言っている。

“Anyone who stops learning is old, whether at twenty or eighty. Anyone who keeps leaning stays young. The greatest thing in life is to keep your mind young.”

「学ぶことをやめた人間は誰だろうと老いた人間だ。20 歳だろうと 80 歳だろうと。学びつづける人間は若い。人生で最も素晴らしいことは、心を若くたもつことだ」

60 歳を過ぎてから、自分で自分を育てていく創造的な生活がスタートする。行政の対応も大切である。地域に期待することも多い。でも大事なことは個人の生き方そのものである。市民大学はそうした姿勢を培う上で大変に有用だと思う。関係の皆様に感謝しつつ、この稿を締めくくりたい。

「生涯学習」の入り口に立って・・・

清水 武

1年次は、総合的な講座内容でしたが、2年次はコース別ということでしたので、私は高齢者の生涯学習、シニアの生き方についてのテーマを選びました。

現在、地元つつじが丘のシニアクラブ（「老人会」と呼ばないところが救われます）に入っていますが、どうも定年になったばかりの60代の若いシニアの加入率が少ないのです。なぜなのか？それについて自分なりに調べ、何か役立っていくことができればと思ったからです。

見たところ、昭島市の老人会連合会、東老連、そして全国の老人会の実態も似た傾向にあります。私が子供だった頃と内容があまり変わっていないのです。長寿社会に入って、これだけ若い活動的なシニアが増えているのに旧態依然のまま。だから若いシニアが魅力を感じないのでしょう。

「♪ 村の渡しの船頭さんは 今年60のお爺さん・・・」と歌っていたころから半世紀あまり。今は60歳の人を「お爺さん」なんて呼んだら、反発感を抱かれるでしょう。昔の60歳は今の70から80歳。定年を迎えたばかりのまだ若い人たちにとっては、老人会の内容があまりにも老人向けすぎるのです。

学校もその成長の度合いにより小学校、中学校、高校、大学と少年期から青年期に分けて設置されているように、シニアの中でも「ヤング」と「オールド」に分けていく必要があるのかもしれませんが、そしてこのヤングに対する受け皿、機構がまだ準備されていないように思うのです。

その糸口を求めようと資料の収集もしました。チューターの小川先生からいろいろなアドバイスもいただきました。仲間の意見も参考になりました。この分野では専門の大串先生に質問もしましたが、現時点では、まだそうした取り組みは少なく、挙げられるような事例はない、とのことでした。

「2007年問題」がいろいろな角度から取り上げられています。明年から団塊の世代が続々と地域におりてきます。その受け皿が求められています。私自身、新聞の世界に生きていた現役時代、今から30年以上も前、「生涯教育」という言葉はあっても「生涯学習」という言葉が見られなかった（私の知った限り）時代に、紙面の企画に「生涯学習」とのタイトルをつけました。

そして定年後は、自らそれを実践しようと、1年目は横田基地の中にあるセントラル・テキサス・カレッジで学び、2年目にはスペインのマラガ大学に1年間留学しました。それは素晴らしく充実したものだだったので、他のシニアの方も是非、との思いもあって帰国後『定年留学してみませんか？——60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ——』との本を著しました。今年の正月明けには、「シニアが元気になる企画」としてFM多摩がそれを取り上げ、私も自分の思いを話させてもらったところです。

1年次の感想文で、「老人」に代わるもっと前向きな新しい言葉を創造したいと述べていたのですが、残念ながらまだ考え付くところに到ってはおりません。これは、今「生涯学習」の入り口に立ったところで、今後の大きな課題と、とらえていきたいと思っています。

ともあれ、こうした学習の機会を用意してくれた昭島市、現場でサポートをしてくださった職員の方々、チューターの先生、一緒にお付き合いをしてくださったグループ仲間から心から感謝したいと思います。

「地域の教育力」実践レポート

(クラス欠席の間の活動報告ほか)

清水 武

この 2 年の間に市民大学に出席できない日が幾日かありました。背景は、ほとんどの場合、ボランティアの行事と重なったからでした。でもその活動は、いわば「地域の教育力」の実践の場そのものでした。そこで追加レポートとしてこの間の活動ほかを報告させていただきます。

1. **スペシャルオリンピックスのボランティア通訳として参加** (05 年 2 月末～3 月初め)
昨年 3 月に長野県で開催された精神的身体障害者のオリンピックです。世界 80 カ国から 2000 人の選手と 10000 人のボランティアが集いました。私はスペイン語の通訳として参加。その模様は郷里の「みのわ新聞」(添付)に掲載されています。(選手団と交流した母校の小学校児童への手紙も添付)
2. **TMC (NPO 法人 立川多文化共生センター) で在日外国人の支援活動**。月 1 回の相談会担当のほか、昨年 12 月には「在住外国人と共生」とのテーマのフォーラムでパネリストとして参加。ここには青木市長を初め、立川市の関係者も出席していました。本年 2 月には弁護士、社労士、司法書士、医師等も加わったりレー相談会の通訳(英・西語)にもあたりました。(在日外国人問題は昭島市でも同様な課題に直面しており、一度このことを北川市長にも申し上げたことがあります)
3. **フルブライト交流で来日した米教育者のホームステイ受け入れ**。昨年 12 月、来市した 20 人のアメリカ人教育者の 1 人を受け入れました。市の公式日程では小学校、中学校、高校を訪問していたので、拙宅では日本文化の紹介や児童館や大学を案内。また中神小学校での国際交流の集いに案内しました。インターネットを使い自分の勤務校の児童たちに毎日、日本の模様を伝え授業をしている姿に(宇宙授業のような形で)、こちらがいろんなことを学ぶ思いでした。
4. **瑞雲中学校の「総合学習」で国際理解についての講演** ボランティアで 3 年生全員を対象に国際理解について話をしました。終わって全生徒の感想文が届けられ、その中に質問もあったので詳しい回答の手紙を出しました。卒業式では校長先生が私の話を引用していたとのことでした。
5. **シニアクラブで子供たちのパソコンの手助け** 昨年 8 月、地元つつじが丘のシニアのパソコンサークル(会長=小生)では月 1 回、児童館を借りて相互研修をしています。会場借用の御礼として、夏休みに子供たちがパソコンでうちわを作る作業のお手伝いをしました。シニア世代と地域の児童との交流という面でも意義があったと思います。

「1」の添付資料のほか、2 ヶ月前に信濃毎日新聞に連載された記事と、昨年 6 月から都立高校のインターネットに載った教材もご参考までに添付しました。どちらも私のテーマ「生涯学習」につながるものです。これらは私のホームページにも載っております。

URL : <http://homepage2.nifty.com/donky/>

本年 1 月 5 日には FM 多摩から、シニアの生き方についてのインタビューも受けました。